

---

# サマーウォーズ 冬

のーと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サマーウォーズ 冬

### 【Nコード】

N1852I

### 【作者名】

のーと

### 【あらすじ】

無事戻って参りました

季節は変わり、冬。高校は冬休みを控え、健二はクリスマスイブに夏希をデートに誘う計画をたてる。交錯する二人の思い、再び混乱するON、集まる一族。戦いはまだ終わっていない！

## 序幕（前書き）

サマーウォーズの二次創作です。作者の独断と偏見、勝手な解釈などが含まれます。それでも構わない、というような方はそのままお進み下さい。原作や劇場版を先にご覧になられることをお勧めします。

## 序幕

1

「やっぱりこのままじゃマズいでしょうか？」

丸い耳をしたきゃしゃなアバターがOZを経由したネット電話で黒い影のようなアバターに問いかける。

「そりゃあそうだろ。第一、半年も付き合っただだまともデートもしてないとは……」

ババアが生きてたら何て言うだろうな、と続けようとしたがやめた。恋愛経験のない彼なりに頑張っているのだ。そこをつけ込むような真似はするべきではない、とふんだらしい。もっとも、以前のこの男ならしただろうが。

その後延々と恋愛や付き合いに対する悩みなどを打ち明けられた、が結局は自分で判断することだと諭した。

3

翌日。健二はいつものように登校した。

あの事件以来、そこまで馴染んでいなかったクラスメートとも打ち解け、数学だけが取り柄の冴えない少年の高校生活は少しだけ明るくなるものとなった。しかし、そんな変化など今の彼にとってはもはやどつでもいいことだった。なんといつても

「健二くん、いる？」

初恋の人、そして現在進行型の健二の”カノジョ” あの学校のアイドル的存在、篠原夏希がこうして教室まで足を運び、自分の名前を呼んでいる。一学期まででは考えられなかったことだ。今でも、都合の良い夢を見ているんじゃないか、と現在のこの状況を信じられなくなるほど。なんて考えている場合ではなかった。健二はギクシャクして席を立ち自分を呼ぶ夏希先輩のもとへ向かう。

呼び出しの内容は実家の修理がやっと終わったので、今度の土日のお祝いに一緒に行かないか、という誘いだった。夏希の実家に行くのはあの一件以来だ。久々に挨拶に向かうという意味でも、健二は快く承諾した。

## 第一幕

この夏、彼女は生まれて何度目かの告白をされた。ただ、今回はその思いに初めて応じた。相手は小磯健二、容姿においても内面においてもひととき目立つ人物。ではなかった。ごく平凡、いや、一般の高校生男子に比べればやや弱々しかったかもしれない。しかし彼は家族を、彼女の一番大切なものを守ってくれた。曾祖母が亡くなった悲しみで途方にくれる自分を元気づけてくれた。弱い部分も全部受け入れてくれた。そういえば裸も見られた。そんなこんなで、もはや健二は彼女にとってかけがえのない存在になっていた。

奥手で恋愛経験の乏しい夏希にとって、付き合って半年で今の状況、それでも十分満たされていた。彼女にとって、これまでより気兼ねなく、親密に、健二といられることが何よりだった。そもそも他のみんなの基準なんて知らないし、気にもならなかった。

放課後、健二はいつものように部室へと向かう。もうクラスでちやほやされるのにも慣れた。それでも、親友と呼べるのはやはり佐久間一人だろう。

「聞いたぜ、また夏希先輩の実家行くんだって？」

部室の扉を開けるやいなや佐久間に問いかけられる。その皮肉に微笑む彼の横には椅子に腰かける夏希の姿があった。彼女は上目づかいに健二を見つめ、ごめんね？言っちゃった、とでもいうように少し申し訳なさに両手を合わせている。そんな彼女の様子を見て、

佐久間は冷やかしを続けた。

「じゃ、俺はそろそろ…」

あとはお二人で、と加えると嫌みな親友はさつさと部室をあとにする。気がつくくと、夏希先輩と二人きり…。健二はとりあえず椅子に座った。以前までならこんな雰囲気は得意ではなかったが、近頃は二人でいられることが心の安らぎとなっていた。相変わらず目が合うとあがってしまって上手く喋れないが。

「ねえー…」

先に切り出したのは夏希の方だった。やはり「はいッ！」とかしこまった返事をしてしまう健二。

「もー、そんなに緊張しなくていいのに」

「す、すみません…」

こんな会話も今や微笑ましいほど、彼らは和んでいた。椅子にっいている車輪を使い、右往左往ゴロゴロと滑りながら夏希は続ける。

「健二くんさ、今日予定とかある？」

「いえ、今日は特に…」

「うち、来てくれない？」

「へ？」

一瞬、言葉の意味が理解できなかった。思わず間抜けな顔になってしまったが、見られただろうか。脳内をいろんな思考が飛び交ったのだがそれもすぐに安堵に変わる。

「頼まれてくれるの！？ありがとー！」

頼まれた依頼は家庭教師（数学に限る）  
そう、受験生なのだ、夏希は。

## 第二幕

高校二年、思春期、ウブな少年は後悔、懺悔。一瞬、ほんの一瞬頭をよぎった妄想。それがたとえ刹那、本当の意味で0.0000000000000001秒だったとしても。

結局浮かない表情のまま、健二は夏希の自宅へと向かう。それでもやはり彼女の自宅へ行くという実感が次第に健二の頭を満たしていく。道中、何度か夏希に話しかけられたのだが、相づちをうつだけで何の話か全く記憶にない。そして

「ただいまあ」

ついに到着してしまった。もはや健二は”まっしろ”だ。

「おかえりー、あら、健二くんじゃない？久しぶりー」

相変わらず気さく、というより少し抜けている彼女の母親の歓迎にも、あやふやな言葉で応じるしかなかった。

どうしたのだろう、本当に頭が爆発しそうだ。たとえなんかじゃない。目も回ってきた。マズい、こんなところで失態をさらすなんて。何も、考えられない…

健二の目の前は真っ白になった。

目が覚めると、見知らぬ天井。頭痛が残るなか健二は起き上がり、記憶を整理し始める。そういえば、夏希先輩の家に誘われて。

ガチャ、と背後から扉の音がした。

「あつ、良かったー！大丈夫？」

健二は不意に現れた部屋着姿の夏希に見とれるが、それもつかの間。今自分が座っているベッドが夏希のものだとさとり、純粋な少年は思わず鼻血を滴らせてしまう。あせる夏希。とっさに部屋にあるティッシュを目一杯わしづかみし、そのまま健二の顔に押さえつけた。どたばたしたものの、なんとかその場は収まった。

「ホント、す、すみません！」

鼻にティッシュを差し込んで、間抜けに頭を下げる。ようやく落ち着いたところだ。

「いいよ、気にしなくて。こっちこそ無理して連れて来ちゃって…」

夏希の表情が曇る。

「毎日OZの仕事もしてるんだもんね」

そう、あの夏の一件以降、そのたぐいまれな計算能力を買われ、健二はOZのオフィシャルエンジニアとして雇われ毎日働いている。もちろん高校に通いながらの特別待遇で。

それでも少しずつ疲労は彼の心身に蓄積されていった。それが出てしまったのだろう。夏希もそのことを察したからこそ、こうして彼を介抱していたのだ。

いつまでもこうしているわけにはいかない。先輩の力になるため

に来たのに、助けられてばかりでどうする。ここからは自分が役に立つ番だ、と彼女のベッドから立ち上がるうとしたときだった。彼女は健二のもとに歩み寄り、立ち上がるうとする彼の両肩を押さえる。事態が飲み込めない健二はなすがまま再び座らせられる。

「あのー…、夏希先輩？」

健二はやや不安を感じながら夏希を見る。すると彼女は寂しそうな表情で口を開く。

「ごめんね、健二くん。私が無茶言ったから」

夏希先輩がこんな表情をしたのは”あのとき”以来だ。気を失ってしまった自分を本気で心配してくれたのだから。目の前にうずくまる彼女を見て、健二は思わず胸が熱くなるのを感じた。何か、何か言わなければ…。

「そ、そんなことないです！」

夏希は顔を上げ、赤くなった目で健二を見つめる。

「夏希先輩のせいなんかじゃありません！ぼ、僕は先輩にそう思ってもらえるだけで十分です！」

夏希は声にならない声でありがとつと言った。

二人とも落ち着いたところで、夏希が言った。

「ところで健二くん、これからどうするの？」

健二はもちろん夏希に数字を教えるつもりだった。しかし、夏希は部屋の時計を指差している。健二は恐る恐る時計に目をやる。

8時24分。

思わず吹き出しそうになるが、こらえる。てっきり5時くらいだと高をくくっていた。大誤算だ。ということは3時間以上寝てたのか、僕は。

啞然とした健二に夏希は追い討ちをかけるように言った。

「泊まってく？」

「へ？」

## 第三幕

耳を疑った。まさかこんなことになるうとは。

「で、でも…」

健二はとりあえず遠慮しようとしたが、すかさず夏希がかぶせる。

「いーの、疲れも溜まってるんだし、今日くらいゆっくりしていきなよ」

健二は何も言い返せない。

「それに、帰り道でまた倒れちゃったらどうするの？」

うつ、確かにそれは困る。しかし、全国の”草食系男子代表”としてそんなにやすやすと引き下がるわけにはいかなかった。「ご両親はいいんですか？それにうちも…」と言おうとしたのだが先を越された。

「あ、うちは大丈夫だから。あと健二くんちにも許可取つといたし」  
もはや健二に打つ手はなかった。

その後、父親の和雄が帰宅し、食卓を四人で囲む 健二にとつてありそうでなかなかないことだった。そこには大家族のそれとは

また違った良さがあった。

しばらくして夏希は健二の頬を涙が伝っていることに気づいた。

「泣いてるの…?」

どうやら本人も自分が涙を流していたことに気づいていなかったらしい。健二はすぐに涙を袖で拭った。

「どうしてですかね?なんか、自分は恵まれてるんだなあ、ってすごく思うんです」

そう言った彼の横顔は心の底から微笑んでいるように見えた。少なくとも隣の夏希にはそう見えた。

こうして篠原家ともう一人は遅めの夕食を終えた。

「えっと、ここはですね…」

これまでいいとこなしの健二だったが、名誉挽回とばかりに張り切って数学を教える。普段他人に勉強を教えることなどない彼ではあったが、彼なりに頑張ろうと決心していた。

しかし、そんな健二の努力むなしく、夏希は睡魔に飲まれかかっていた。彼女のうとうと顔に思わず見とれてしまったが、すかさず声をかける。

「あのー…、夏希先輩?」

呼びかけられた瞬間、彼女はパチツと目を見開く。

「いや、寝てないよ？」

「でも…」

健二は夏希の口元に目をやる。ハッと気づいた彼女は垂れかけていたよだれをゴシゴシとふく。

「大丈夫！大丈夫だから」

何が大丈夫なのかはわからないが、彼女の様子を見てフフ、と笑いが出てしまった。

「あつ、今笑ったでしょ？」

「笑ってないですよ」

「絶対笑ったー」

その後花札で遊んだり、結局この日はあまり勉強できないままだった。互い違いに風呂を済ませ、就寝のときを迎える。夏希は自分のベッド、健二は部屋のスペースに借りた布団を敷いて寝ることとなった。

無事、篠原家で一夜を過ごした健二は一家より一足先に目を覚ましていた。

## 第四幕

5 - 1

オフィシャルエンジニアに支給されるハイスペックノートPC、それが今の健二の端末機だ。彼は常にこれを持ち歩いている。

仮想現実都市OZ、ここでは娯楽はもちろん、あらゆる公的事业、商取引、国際外交など、その存在価値は現実社会に匹敵するほどだ。全世界10億人のユーザーを抱えるOZ、そのセキュリティは世界一と謳われていた。半年前までは。この夏、一人の数学オタクもとい数学オリンピック日本代表 になりそこなった少年にセキュリティを破られ、仮想都市は大混乱となった。そんなこともあつてか、現在当時のセキュリティを破った張本人、健二はOZシステムセキュリティ暗号課に属している。単純に言えば、こと数学においては天才を超越した小磯健二に解けない暗号は、世界中誰にも解けないということだ。

そして彼の提案により、暗号化したパスワードを2056桁の数字にするのではなく、健二の考え出した特別な計算方法によって算出された数字4000桁と96のアルファベットからなる暗号が起用されている。そしてパスワードはリアルタイムの変更を可能にし、OZのセキュリティは再び完全無欠の領域、にまで持ち直した。

しかし、ここ最近OZで妙なことが起きていた。OZのまったく関連性のない場所に黒いサンタクロースのアバターのようなものが出没し始めたのだ。今のところ実害はないものの、実際そんなアバターは登録されておらず、オフィシャル側はシステムのバグか、ウイルスか、対応に追われている。一応バグという見解が有力だが、健二は”あのとき”と同じ胸騒ぎを感じていた。

健二はいつものようにアバターを介して渡される数字の羅列を黙々と自身が考案した計算式に当てはめていく。あまりに特殊なその計算は彼にしかできず、今やOZの公的機関のパスワードの70パーセントあまりが彼の手にかかっていると云っても過言ではない。

毎日のように数字を暗号化する日々　並大抵の人物なら一週間ともたないだろうこの作業を、彼は半年近く続けているのだ。当の本人はまったく苦を感じていないのだが、数式を解きだすと時間を忘れる彼の性格上、やはり体に疲労は蓄積してしまう。今後は気をつけなくては　夏希先輩のためにも…、ふと彼女の笑顔が顔をよぎり少し頬が赤らんでしまう。

とりあえず無理のない程度のノルマをこなし、彼はOZとの接続を切った。

l o g o u t

ふう、と息をついてPCを閉じる。隣でまだグツスリと眠っている夏希に目を奪われながらも、彼は時計に目をやった。8時12分

… 遅刻ではないか！

またやってしまった、ついつい数式の世界に入りこみすぎた。起きていたのに遅刻した？寝坊より夕チが悪い、なんて言ってる場合ではない。急いで支度しないと。

まずは、夏希を起こす… どうやって？わからないままとりあえず声をかけてみる。…起きない。今度は先ほどよりも少し大きめな声で呼びかける。しかし、彼女は少し寝返りをうつ程度でまったく目を覚ます気配がない。”眠り姫の目を覚ますのは運命の相手のキス”なぜかこんなフレーズが頭をよぎった。健二は本能のおもむくままに少しずつ自分の顔を夏希の顔に近づけていく。心臓が爆発

しそうだ。鼓動はもはや大太鼓のように大きく、小太鼓のように早かった。あと20センチ、10センチと、その距離は息のかかる範囲にまで到達した。5センチになるところで健二は思いとどまった。いけない、先輩の同意もなくこんなことをするなんて！しかし、彼は近づきすぎた。とっさに目標を唇から頬に変更し、勢いに任せキスをした。人生初のキスだった。

## 第五幕

いまだに体の震えが止まらない。ラッシュを過ぎた平日の電車内は思ったより空いていた。あれから30分ほど経っただろうか？勢いに任せ夏希の頬にキスしてしまったから、何とも言えない雰囲気になってしまった。健二は罪悪感から話しかけることができず、夏希も先ほどからずっとうつむいている。

30分前　僕は先輩の頬を奪って（？）しまった。あれほど目覚める気配のなかった彼女だが、思わぬ奇襲に飛び跳ねるように起きた。そしてしばらくキョトン顔をした後、急激に顔を赤くしていく。

「え…？…えええええー?!」

それが、今朝先輩が発した唯一の言葉である。

その後、急いで支度をして篠原家をあとにする。互いに無言のまま今に至る。

ああ…、どうしてあんなことをしてしまったんだ…。大切な、たいせつな夏希先輩を傷つけてしまうなんて…。

頭の中には”やってしまった”という後悔のみがこだまする。言いたくえようのない不安が胸に募る。…泣きそうだ。

気まづい…

永遠に続くかと思われた時間、息も詰まるほどの居づらい雰囲気  
痛い…。こんな空気はイヤだ…。

結局、学校でも終始上の空のまま。何か、とても重いものでも背  
負ったかのように、健二は肩を落として部室へと向かう。

夏希の姿は        なかった。

佐久間の姿もなかった。

…まあいい。いつものように仕事に取りかかろうとしたときだっ  
た。

誰かが部室の扉を開け、手招きしている。  
僕は部室を出た。

夏希先輩…!!

朝の調子とは違い、いつも通りの柔らかな笑顔でジッと見つめら  
れた。

「朝のアレ…、嬉しかったよ?」

えっ？

「ただちょっとびっくりしちゃって」

先輩は照れたようにうつむいて頭をかいている。驚いた。てつきり…、てつきり嫌われたとばかり思っていた。そして少し経って改めて安堵がこみ上げてきた。

「健二くん…？」

恐らく相当間の抜けた顔をしてしまっていたのだろう、夏希先輩の様子から想像はつく。

「い、いやあ、てつきり…嫌われてしまったのかなと…」

その言葉を聞いて、彼女はぷーっと頬を膨らませて、少しばかり上目づかいで健二を見る。

「そんなこと思ってたのねー。健二くん、私のことそんなに信用できない？」

「決してそんなことはありません！」と言おうとしたのだが、彼女は、「そんな返事お見通しなんだから」とでも言うような表情で続けた。

「私は健二くんのこと、好きだよ？」

何気なく”好き”と言ってくれて、嬉しかった。

「それはこれまでもそうだし、これからもそう」

心から嬉しかった。いつもの調子で自分の思い過ごしを否定してくれる彼女はやっぱり 頼もしかった。

僕はいつも助けてもらってきた。昨日だってそうだ、先輩の役にたてるはずだったのに、いつの間にかまた助けてもらっていた。

今度は。

今度は僕が夏希先輩を喜ばせるんだ！

少年は決意を新たに…、出発は明日である。

## 第六幕

「お待たせー」

やっぱり夏希先輩、冬の私服も可愛い。白いパーカー、赤いマフラー、チエックのスカート、脚の…何て言っただろうか…、そうレギンス、あとなんかモコモコした帽子。どれをとっても先輩らしく、何と言うか、胸がドキツとした。

「ちょっとは”オシャレ”も学んだつもりだったが、まだまだだと思っ。

「健二くんカッコいいよ！」

「いやいや、先輩ほどではありませんまい。」

「先輩も、とても可愛いです…！」

道中はやっぱり、こんな会話が延々と。

やっと着いた…。

相変わらず陣内本家はバカでかかった。あのとき床と枠組みほどもしか残らなかつた家も見事に再建されていた。

今日は12月17日土曜日、冬休み前最後の週末。

僕らは親戚のあいさつを済ませ、荷物を片づけ、とりあえず落ち着いた。

しばらくして仏壇へと向かった。一番あいさつをしなければならぬ人がいるからだ。

お久しぶりです

それはそうと、今回、僕と夏希先輩は同じ部屋だ。

あのときと同じ…、陣内家の大宴会が始まった。ただ今回は、以前高校球児として活躍中だった了平くん、この秋産まれた佳主馬くんの妹、煙たがられていた侘助さんも参加している。

そして…

家族の中心は… 空席だった。 誰一人としてそのことを口に  
する者はいなかった。むしろ、食事中にそんな話題を振って楽しい  
雰囲気盛り下げてしまったら、それこそ天国にいるであろう大お  
ばあちゃんに叱られる。みんなが”あの人”を知っているからこそ、  
食事どきは楽しく、賑やかに過ごした。

食後、片付けを手伝っていると、彼が話し掛けてきた。

「はあー、これが噂の…」

「健二くん!」

一族の中で唯一初対面の”甲子園球児”了平くん、そしてとても  
自慢気に僕を紹介する夏希先輩。

「よろしく」

「ど、どうも…」

とりあえず握手。そんなに爽やかな笑顔でこちらを向かれると、  
とてもまぶしい。

「へえ、いいじゃん夏希」

「でしょー」

第一印象が”いい”というのは僕の中では結構珍しかったりする。

「でも意外だな、夏希から誘ったんだろ？」

同じ高校生の従兄弟だ。夏希の軽い男性恐怖症についても良く知っているだろう。

「まあとにかく、幸せにやれよ」

なんかとてもスケールの大きい一言を残し、了平くんは背中を向けたまま手を振って去っていった。

夏希先輩は夕飯の片付けを手伝うそうぞ。

「久しぶり……」

部屋に戻った僕のもとに現れたのは何をかくそう我らがキング・カズマこと佳主馬くん。

あの事件の後、OZを救った英雄の象徴として、夏希のアバターと共に”殿堂入り”を果たした今を輝くスーパースター。今では大

手スポンサーも増え、実生活においてもあらゆる支援を受けている。

「相変わらずらぶらぶなの？」

「えッ、いやあ、まあ」

「ふーん。」

無表情に何か考えるようすの佳主馬。

「どこまでいったの？健二さんのことだから、どうせキスもまだなんじゃない？」

何とマセた質問だ、しかし事実、度胸のない健二はただ引きつった笑みを見せることしかできない…。

そんな僕のようにすを見て彼は少し驚いた顔をした。

「…ってホントに？」

僕はハハハと笑顔でごまかしながらうなづく。

「…健二さん、そういうことに関してはホントだめだね…」

笑えない…、自分でも情けないとは思っ。問題は夏希先輩がどう思っているか、だ。

「まあいいや…、ところでONZの最近のアレ、知ってる？」

黒サントのことだろう。僕は一応確認する。

「例の黒サントのことだよな？」

「うん…、オフィシャルはどう対応してるの？」

「あー、一応システムのバグってことで処理してるんだけど…」

佳主馬くんの表情は曇っている。

「…知ってる？最近OZの一部でこんな噂が流れてる」

彼の話によれば、やはり黒サントはシステムのバグなどではなく、いわゆる”ウイルス”の一種らしい。しかし、OZはシステム構造上ウイルスが発生しない。つまり人為的に発生させられている、ということになる。

そして……。

12月24日、現実社会はOZに堕ちる。

第七幕（前書き）

すみません

おそくなりました…

## 第七幕

佳主馬くんは意味深な言葉を放った。そしてそれは僕の中の実体のない不安と繋がって大きな黒い渦を巻いていた。

しばらくして、夏希先輩が部屋に戻ってきた。…何かあったのだろうか？またずいぶんとウキウキしているようだ。そんな先輩も…おっと、ついついまたこういうことを…。いやいやノロケとかじゃないんです。誰だって夏希先輩のこんな様子を見ていたら心を貫かれてしまうだろう。

「佳主馬くんと何の話してたの、ONZ？」

「あつ、はい。久々なんで色々…」

「へー、そうなんだー、……ところで健二くん…」

先輩がなんか、なんか妙な態度で僕に詰め寄ってくる。あれ？これってまさか…。

「ねえー…健二くん。私たちってえ、付き合ってるんだよね…」

なんか本当に様子がおかしい。こんな積極的(？)な先輩……、  
アリだ…。

いやいやダメダメ！ナシ、ナシだよ！

「私ねー…、いつでも健二さんと会えるんだーってだけで満足だったんだよお？それでキスもまだ…って言ったら、みんなすごく私のこと哀れんだ顔で見てくるんだよ…？ねえ…健二くん、私のこと好き？」

間近に迫った先輩の頬は通常ではない朱に染まっていた。そしてふりかかる吐息でわかった。

彼女は酔っている、と。

だが、酔っているとはいえ夏希先輩は夏希先輩だ。それほど近づかれてしまっただけは僕としても冷静な判断ができなくなってしまう…可能性はある。すでに決まっているその言葉をつまく発することができず、少しアグレッシブになった先輩相手にどきまぎすることしかできない自分に腹が立つ。

決意を固め、改めて自らの想いを先輩に伝えようとゆっくり口を開く。大好きです、と。

しかし、僕の決意の言葉は彼女の耳に届くことはなかった。気づ

くと足元からすーすーと可愛らしい息づかいが聴こえた。

先輩は眠ってしまったのだ。

あとで、万里子おばさんに事情を聞いたところ、先輩はジュースと間違えてカピスサワーを口にしてしまったとか。しかもアルコールには極端に弱かったらしく、性格が急変し、語り出したという。

僕は先輩の布団を用意しておいた。あとはおばさんたちがやってくれるらしい。

歯も磨いて風呂にも入った。陣内家の一日が終わるだろうか、という頃合い、彼は静かに僕を呼び出した。

「どうしたんですか？こんな時間に」

聞くまでもなかっただろう。彼陣内侘介は前回の事件の元凶であるラヴマシーンを作り出した人物である。その知能はアメリカのそういうところから声がかかるほどだ。今回の件についても何か知っているかもしれない。

そう、その程度にしか思っていなかったんだ。

彼は静まり返った陣内家と庭を見渡し、いつもとなんら変わりないおどけた口調で言った。

「シシ、事態は知ってるんだろう？俺さあ、犯人知ってんだよね」

一瞬、飛躍した事態を飲み込めなかった。

「結論から言うと、そいつは俺の助手だ。…向こうでの、昔話だけどな」

彼はやはり少し楽しそうに続けた。自分の過去の助手が何かをやらかすのが彼の好奇心を刺激するのだろうか。

どうやらその助手とやらは数学オリンピックのアメリカ代表で、世界一のIQを持っている、だそうだ。彼が向こうにいた頃から異様な雰囲気醸し出していたらしい。話によれば研究者の中でも明らかに異端者で忌み嫌われていたそうだ。生まれつきの頭脳のせいであつと孤独だった彼を侘介さんだけは認め、自らの傍らにおいた。しかし、ラヴマ事件以後の行方はわかっていないとか。

唐突に周りの光がなくなった。全員が眠りについたら  
わけでは  
ない。明らかに停電だった。原因は恐らく

l o g i n

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1852i/>

---

サマーウォーズ 冬

2011年4月13日20時45分発行